### 日本科学技術ジャーナリスト会議 会報 No.95





Japanese Association of Science & Technology Journalists

## JASTJの大きな潜在力

室山哲也

最近、「多様性」の大切さを、つくづく思う。

子供の昆虫の本を見ていると、面白い名前が並ん でいる。昆虫は、生物界でも最も多様化したものの 一つで、新種を見つけて名前を付けると、その後、 同グループだが少し違うのが出てきて、また名前を 付ける。そうするとまた次に新しいのが・・という具 合なのだそうだ。

例えば、ハムシ→トゲハムシ→トゲナシトゲハム シ→トゲアリトゲナシトゲハムシ…と怪しい名前が 続いている。ゴミムシ→ゴミムシダマシ→クロホシ テントウゴミムシダマシ→ニセクロホシテントウゴ ミムシダマシ・・というのもある。地球型生物は、い ま3000万種ほどいるらしい(1億種という意見もあ り定かではない)が、名前がついているのが200万種 足らずだから、我々になじみのない生物が地球には、 ごまんといることになる。(この豊かな生態系に、そ のうちの一種に過ぎない人類が、悪影響を与えてい るのは、大きな問題だ。)

しかし、そもそもなぜこんなにたくさんの種がい るのか?ドーキンスによれば、生物はDNAを運ぶ箱 に過ぎず、遺伝子DNAが生き延びていくための仕組 みなのだという。そして多様化した3000万種の生き 物たちは、互いに生かし生かされ、支えあいながら、 「生命の船」を航海させているというわけである。

では、なぜ多様化がいいのか?多様性はしぶとさ につながるからである。例えば、船の船室が一つだ けの場合、座礁したらあっという間に沈没するが、 船室をいくつにも分けておくと、浸水は一か所にと どまり、沈没しない。農業も同じだ。大規模単一作 物では、一つの害虫で全滅するリスクがあるが、多 様な作物を組み合わせて農地を作ると、被害は一部 にとどまり、全体は生き延びる。多様化は、システ ムを維持するための絶好の方法なのだ。

このことは、文化や社会にも当てはまる。「新しい 文明は、異質な文明の交差点に生まれる」という言 葉があるが、新しい文化や価値も、多様性の中の化 学反応で生まれる。

私は、かねがね、JASTJは「文化のるつぼ」だと 思ってきた。著名な科学記者やジャーナリスト、テ レビプロデューサー、科学雑誌の編集長、天文学者、 SE、研究者、主婦、大学生、弁護士など、実に多彩 な人々が集まっている。私はもともと、テレビプロ デューサーだったが、新聞記者の方々の文章力には いつも舌を巻く。過不足のない的確な表現。そして その主張の切っ先がこちらの胸に、鋭く迫ってくる。 映像表現では負けないが、文章表現ではとても足元 にも及ばない。そういう能力を、会員の方々はそれ ぞれ持っている。しかも、レベルがかなり高い。

以前、月例会で、外部講師でなく、会員の方に講 演をしていただいたことがある。その内容の濃さに 驚いた。もしJASTJに属する人々の才能が化学反応 を起こしたら、大きなパワーを生み出すに違いない。 私の眼には、JASTJ会員は、まさに「宝の山」であり、 JASTJが内包する潜在力は果てしないもののように 見える。

JASTJは、もともと科学ジャーナリストが集まっ て出来た団体だが、今では、ジャーナリズム精神を 核としつつ、幅広く「科学コミュニケーション」を 展開する団体として成長している。今後は、市民と 科学・技術をつなぐ存在として、さらに翼を広げ、 生き生きと、楽しく、刺激しあえる場であってほし いと思っている。 (JASTJ会長)

### CONTENTS

巻頭言	1
ニュース	2

総会報告/科学ジャーナリスト賞2020/新型コロナ とJASTJ (オンライン化、緊急勉強会、COVIT-19情 報整理)/随想「もう一つのコロナ」

例会報告(3月)	深刻化する海洋異変	7
例会報告(4月)	新型コロナ感染拡大いつまで続く	8
例会報告(5月)	新型コロナでどう変わる?	9
オピニオン/ WE	B編集長から1	0
事務局だより	1	2

### -:∙総会報告

## "コロナ時代"の新展開を

日本科学技術ジャーナリスト会議(JASTJ)は6月、新型コロナウイルスの感染拡大防止に対応して初めて定期総会をオンライン方式で開催、2020年度の事業計画や予算などの議案を承認した。総会後の6月13日には新理事を加えて理事会を開き、佐藤年緒理事の



新会長に選出された室山 哲也理事(撮影 都丸亜希子)

会長退任を承認、新会長に室山哲也理事(写真)を 選出した。副会長はICT時代の発信力強化を目指し て3人から5人に増強、多様なメディアを駆使した 「コロナ時代」の新展開を目指す。

総会は例年5月末までに開催しているが、今年はコロナ禍の下で集会開催の可否が見えなかったため6月に延期、メールによる投票に切り替えた。会員にはメールで議案書を事前に送ったほかYouTube動画で補足説明をし、質問もメールで受け付けた。6月12日の投票締め切りまでに一般会員48人が投票、投票率は25%となって定足数を満たし、全議案が承認された。

### ■総務・財務

創立25年を迎えた19年度はさまざまな活動が展開されたが、明るい話題の1つは会員数の増加。個人会員は5人増の189人。賛助会員は4団体(日本医工研究所、量子科学技術研究開発機構、日本アイソトープ協会、豆蔵ホールディングス)増えて16団体になった。決算、予算は別表の通り。

#### ■企画委員会

19年度は「月例会、見学会、勉強会、塾など、充実した活動ができた一年だった。塾と月例会や会報作成などを融合し、垣根を越えた活動ができたことに満足している」と企画委員会としては総括している。20年度は、従来の活動の路線を踏まえつつ、月例会にネットジャーナリズムの講師を呼ぶなどICT時代にも対応した未来型の活動を目指す。

新型コロナの状況によってZoomなどのシステムを取り込むことで対応し、ネット特性を利用した新しいタイプの活動にも挑戦する。いずれも会員限定の「会員紹介ユーチューブチャンネル」や「Zoom会員サロン」を通じて、会員の相互理解を促進し、

JASTJを支えるパワーを強化したい。

### ■科学ジャーナリスト賞委員会

19年度は委員会活動の一環として、科学書の著者を招く「サイエンス・ブック・カフェ」を初めて導入し3回実施することができた。また、賞の外部選考委員だった米澤富美子先生が亡くなられたため、新たな外部選考委員を大隅典子・東北大学大学院医学系研究科教授(副学長)にお願いした。科学ジャーナリスト賞2020は応募73作品から一次選考会で新聞2点、書籍4点、映像3点、WEB・企画2点を選んだ。最終選考会はコロナの影響で例年より遅れて6月6日に開催、一次通過作品の中から優秀賞3作品と特別賞1作品を決めた。贈呈式は21年度の受賞作と併せて来年に実施することにした。

### ■編集委員会

19年度末の94号では新型コロナ感染拡大を受けて JASTJの対応状況を急きょ掲載した。WEBはできる限り多くの情報をタイムリーに会員に届けることを心掛け、30近くのニュースを掲載したほか、会報 93号からは誌面が出来上がり次第、印刷・会員への配布を待たずにJASTJのホームページで速報するようにした。

20年度は、新型コロナの感染動向を注視しながら、WEBを用いたJASTJの新しい取り組みなどを的確に報告できる会報作りに努める。WEBでは、企画委員会が中心になって進めている会員限定のJASTJチャンネルや「COVID-19 科学ジャーナリストのための情報整理」などの新しい試みを積極的に取り込み、JASTJ全体の発信力強化に努める。

### ■国際委員会

第11回科学ジャーナリスト世界会議が19年7月、スイス・ローザンヌで開かれ、83国・地域から1137人(JASTJからは10人)が参加した。来年予定されている次回の世界会議2021はコロンビアで開くことが決まっている。世界科学ジャーナリスト連盟(WFSJ)では新型コロナウイルス・パンデミックに対応して、論文や報告など科学情報を交通整理したサイト、ツイッターを充実させている。こうした関連情報も含めて、随時JASTJ会員に配信していきたい。 (事務局長 山本威一郎)

## 2019年度 決算報告 (2020年3月末:単位は円)

	収入			支出	
前年度繰越金		4,422,834	費目	摘要	
会費収入	正会員 (189名)	2,220,000	事務局職員給与		795,462
	賛助会員(16社20口)	2,400,000	事務所家賃		1,064,031
			会議費	(総会、理事会等会議室借用)	104,050
			交際費	(懇親会)	96,787
会費小計			備品・消耗品費	(文具、郵送代、0A機器等)	273,203
その他の収入	参加費 (月例会、勉強会、懇親会等)	322,000		(電話、メール管理料)	171,088
	塾関連費		支払手数料	(振込手数料、ビジネスWEB)	79,246
	寄付		源泉徴収税	(講師料など)	51,508
	雑収入(上映会寄付・飲み会おつり)			(会計作業費、総務関係費、理事交通費など)	371,740
	利子	19	雑費		25,710
			管理関係小計		3,032,825
			企画委員会 (月例会、総会など)	(会場費、講師代等)	436,369
			企画委員会 (ジャーナリスト塾)	( - A 1- T ( - B	322,018
			編集委員会	(4回会報発行分、HP運営費)	972,818
			国際活動委員会	(世界連盟会費、国際会議出張費)	379,766
			科学ジャーナリスト賞委員会	(会場費、会議室借用、選考謝礼、書籍、郵送等)	930,704
7 0 // 1 = 1			特別プロジェクト費	(福島原発事故その後を検証、AI勉強会)	214,371
その他小計		932,694			3,256,046
単年度収入計		5,552,694	単年度支出合計		6,288,871
			収支		-736,177
			次年度繰越金		3,686,657

### 2020年度 予算計画(単位は円)

	収入			支出	
前年度繰越金		3,686,657	費目	摘要	
会費収入	正会員 (189名)	2,220,000	事務局職員給与		700,000
	賛助会員 (16社20口)	2,400,000	事務所家賃		1,064,000
			会議費	(総会、理事会等会議室借用)	70,000
			交際費	(懇親会)	60,000
			備品・消耗品費	(文具、郵送代、〇A機器等)	150,000
会費小計		4.620.000		(電話、メール管理料)	120,000
その他の収入	参加費(月例会、懇親会等)	, ,	支払手数料	(振込手数料、ビジネスWEB)	80,000
	ジャーナリスト塾会費		源泉徴収税	(講師料など)	60,000
	寄付		事務局総務委員会予備費	(会計作業費、総務関係費、理事交通費など)	350,000
	雑収入	30,000			20,000
	利子	20	管理関係小計		2,674,000
			企画委員会 (月例会)	(会場費、講師代など)	350,000
			企画委員会 (ジャーナリスト塾)	(会場費、講師代など)	200,000
			編集委員会	(4回会報発行分、HP運営費)	944,000
			国際委員会	(世界連盟会費等)	280,000
			科学ジャーナリスト賞委員会	(会場費、会議室借用、選考謝礼、書籍、郵送等)	450,000
			委員会予備費	各委員会予備費、特別プロジェクト費	300,000
その他小計		580,020	委員会小計		2,524,000
当年度収入合計		5,200,020	当年度支出合計		5,198,000
	·	·	収支		2,020
			次年度繰越金		3,688,677

## 2020年度の理事及び監事と主な担当

会 長	室山 哲也	
	内城 喜貴	企画委員長、編集広報
	柏野 裕美	編集広報委員長(IT)、企画、国際
副会長	高橋 真理子	総務委員長、国際
	瀧澤 美奈子	編集広報委員長(統括)、企画
	滝 順一	J賞委員長
会報編集長	井上 能行(新)	編集広報
WEB編集長	湯浅 誠	編集広報
事務局長	山本 威一郎	総務(財務担当)
	縣 秀彦	企画
	飯島 裕一	J賞
	大池 淳一	J賞
理事	大江 秀房	編集広報
连 <del>事</del>	鴨志田 公男	編集広報、J賞
	倉又 茂	編集広報
	小出 重幸	国際委員長、編集広報、企画
	佐々 義子	J賞

理事	佐藤 年緒	総務
	高木 靭生	編集広報
	滝田 恭子(新)	J賞
	武部 俊一	編集広報、J賞
	都丸 亜希子	編集広報、J賞、企画
	中道 徹	総務、J賞
	西野 博喜	編集広報
	林 勝彦	J賞
	早野 富美	企画、編集広報
	藤田 貢崇	総務
	三輪 佳子	編集広報、国際、総務
	村松 秀(新)	J賞
	元村 有希子	J賞
監事	北村 行孝	
血 尹	佐藤 征夫	

注)名前は50音順。(新) は新任。理事は企画、編集広報、科学ジャーナリスト 賞 (J賞)、国際、総務の5委員会のいずれかに所属する。

退任挨拶

## face to faceの夢捨てず

2017年度から会長を務めた3年間、JASTJはますます幅広い層の個人や団体が集い、活動に多様性が生まれている姿が見られたことに感謝する。創立25年の節目は、科学ジャーナリズムの原点を振り



返り、その良きスピリットを若い世代に継承する時 だと認識した。新型コロナウイルスとの闘いが課題 の今、私たちの歩む道筋に未知数が多いが、「世界 の人々の健康」は間違いなく挑戦テーマである。

室山会長の新体制のもとで、コロナ問題を契機にした新しい発想や意欲に溢れた活動に期待している。総会の議案書には盛り込まなかったが、その延長線上に、いつかまた世界の人々や地方の人々とface to faceで対話・交流し、握手し合える関係の再興という将来ビジョンを持つことを忘れず、多くの会員と共有してほしいと願う。

(理事/前会長 佐藤年緒)

# 優秀賞3作品のほか特別賞も決定 科学ジャーナリスト賞2020

優れた科学報道や著作、科学コミュニケーション活動などを表彰する「科学ジャーナリスト賞2020」の受賞者が6月6日に開いた最終選考会で決まった。15回目となる今回は優秀賞3作品と特別賞1作品を選んだ。特に優

れた作品に贈られる大賞は 「該当作なし」となった。

応募総数は新聞3、映像 13、書籍50、展示4、WEB 3の計73点で、前回の58点を 上回った。最終選考会では、 1次選考を通過した11作品 (新聞2、映像3、書籍4、 展示・WEB2)を対象に議 論した。

優秀賞3作品のうち、「南

海トラフ80%の内幕」は、国の地震調査委員会が南海トラフ地震の発生確率を70%から80%に上方修正したことに着目し、決定過程の不透明さや政府・専門家の不作為に切り込んだ。折しも新型コロナウイルス対策の決定を

コロナ禍で開催時期が例年より大幅に遅れ、一部委員はオンライン参加するなど異例の選考会となった (撮影 佐藤年績)

めぐり、科学者・専門家と政治との関係が取り沙汰され、 議事録の作成・保管にも注目が集まっている。記者によ る粘り強い調査報道の今日的な意義が高く評価された。

「誰が科学を殺すのか 科学技術立国『崩壊』の衝撃」

は、日本の科学技術力が国際的な存在感を失う現状を描き、疲弊する研究現場や科学技術政策決定の背景に迫った。「一つの政策をめぐってすれ違う科学者と政治家の思惑が、実名のインタビューを通して深く理解できた」との声があった。

「ルポー人は科学が苦手 アメリカ『科学不信』の現場から」は、反科学的な言動が目立つト

ランプ政権下の米国で特派員として取材活動をした記者 による書き下ろしだ。進化論を退ける人々を訪ね歩いて 主張に耳を傾け、地球温暖化に懐疑的な人々の心理をさ まざまなデータから分析するなど、「反科学」の背景を

	中日新聞編集局社会部記者 小沢慧一 「南海トラフ80%の内幕 (2019/10/20 ~ 12/1、7回連載)」
優秀賞	毎日新聞「幻の科学技術立国」取材班 (代表 須田桃子) 書籍「誰が科学を殺すのか 科学技術立国 「崩壊」の衝撃」
	読売新聞東京本社編集局科学部次長 三井誠 書籍「ルポ 人は科学が苦手 アメリカ「科学不信」の現場から」
特別賞	NPO法人「科学映像館を支える会」理事長 久米川正好 「科学映像館」の取り組み http://www.kagakueizo.org/

選考委員(50音順、敬称略)【外部委員】相澤益男、浅島誠、大隅典子、白川英樹、村上陽一郎 【JASTJ委員】大池淳一、佐々義子、滝順一、林勝彦、元村有希子 掘り下げようとする試みが評価された。

特別賞には「『科学映像館』の取り組み」が選ばれた。 企業や個人が保有する科学技術映像をデジタル化し、ア ーカイブとして無料公開する活動だ。年度をまたぐ継続 的な活動は、本来の賞の対象には該当しないが、科学技 術史料の散逸を防ぐ地道な取り組みを評価する声が多く あった。

選考委員会は、2019年に死去した米澤富美子さんの後任に大隅典子・東北大副学長が就任した。また、柴田鉄治委員長の退任に伴い、委員長職は選考委員の元村が、

空席となった委員は滝順一理事が引き継いだ。

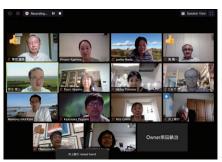
コロナ禍により、最終選考会は約2カ月遅れで開催された。再び東京に「アラート」がともる中、大隅委員は仙台市のオフィスからオンラインで参加した。その他の委員も1メートル以上の「社会的距離」を確保し、マスク着用で臨むなど異例の選考風景となった。

贈呈式は来年、2021年の贈呈式と併せて行う。記念品は別途、受賞者に贈られる。選考委員の講評は次号掲載の予定だ。 (理事/選考委員長 元村有希子)

## 新型コロナと JASTJ

## オンライン化が見せた "広がる世界"と"集える良さ"

新型コロナの感染が拡大した3月以降、JASTJはさまざまな活動をオンライン実施に切り替えた。一時的とはいえ現場重視のジャーナリストにとっては抵抗ある試みだったが、一方で地方会員が参加しやすくなった、タイ





5月2日に開催したJASTJサロンの様子。チャット機能も活用した。 (撮影 柏野裕美)

ムリーな勉強会の実施が容易になった、など今までにないメリットがあることも明らかになった。

最初にオンラインで実施したのは3月の理事会だった。次いで4月の月例会という具合に、理事から会員へと活用の場を広げた。初の試みだったため、参加者に接続の練習を呼びかけた。オンライン会場を開けると、会員の顔が続々と画面上に並ぶ。無事接続できたことにほっとするとともに、使用している端末やOSがそれぞれ異なるため、接続がうまくいかない会員を遠隔でサポートする難しさにも直面した。

月例会や勉強会は企画と運営メンバーで事前にリハーサルをし、会を進行するための打ち合わせもオンラインで実施したが、録画する画面の切り替えのすり合わせなどはオンラインならではと感じた。会員が集い、肩を並べて交流できる日が待ち遠しいと同時に、JASTJの活動を継続するためのオンライン化で広がる世界も活かしていきたい。 (副会長 柏野裕美)

### 新型コロナと JASTJ

## 「実行再生産数」で緊急勉強会 西浦博・北大教授を講師に

JASTJは5月12日、北海道大学の西浦博教授をゲストに迎え、「実効再生産数 (Rt)を使ったコロナ対策」をテーマに緊急勉強会を開いた。勉強会の様子は、Zoomとニコニコ生放送で会員はもとより一般にも公開した。ニコニコ動画が付けた「【8割おじさん西浦教授に聞く】新型コロナの実効再生産数のすべて」というタイトルこそ軽めだが、その中身は堅実な科学そのもの。コロナ対策のなかで重要な指標である「実効再生算数 (Rt)」の計算手法について、プログラムとデータを公開したうえで念入りに説明する、という贅沢な講義が展開された。

すでに著名な西浦さんの講義ということもあり、視聴者は1万5200人以上、コメント総数は9500以上にのぼる大盛況のイベントとなった。ニコニコ生放送恒例の終了後アンケートでは、90%以上が「とてもよかった」と回答した。辛辣な聴衆が集まる場での専門的な内容としては、驚異的な好反応を得たと言える。

コンピューターとネットが普及し、データの入手も容



勉強会では大半の時間が 西浦教授によるRtの専門 的説明に。(ZOOM画面)



易になった現代では、科学的な「検証の責任」は科学者だけのものではない。もはやジャーナリストも、その責任の一端を担わされている。また今回は米インディアナ大学の江島啓介講師もゲストとして参加した。江島さんには「科学的レビュアー」、すなわち公衆の面前で西浦教授の手法にピアレビューを行い、参加者の理解を深める役割をお願いした。

### オープンサイエンスの扉開く

この会が開かれるまで、西浦さんは「データや数式を 隠している」といった批判を浴びていた。しかし、基本 的なデータは研究者たちの泥臭い努力によって、自治体 の公開情報を組み合わせたものであり、基本的な計算手 法もプログラムとして誰もが利用できる状態にあるもの だった。視聴者は驚愕していたが、同時に「自分でも検 証できる」と励まされもしただろう。

社会の科学的議論が高まるコロナの禍中にあって、こうした「オープンサイエンス」の場をJASTJが提供した

意義は極めて大きかった。実際、開催から数日のうちに データサイエンティストが追試をして西浦教授の手法の 細部を解説する記事を公開したし、自身でRtの計算を 始めた報道現場の若手もいる。この取り組みがきっかけ となり、「科学的な科学ジャーナリズム」の新たな潮流 が生まれていくことだろう。 (会員 田中幹人)

#### 新型コロナと JASTJ

## 科学ジャーナリストのための 情報発信ページ開設

JASTJは4月5日に新型コロナに関する信頼できる情報を収集整理して発信するサイト「JASTJ COVID-19 科学ジャーナリストのための情報整理」を開設した。新型コロナ対策に関する社会の意思決定に大きな役割を果たす科学情報を、主に国内の科学ジャーナリスト向けに発信する狙いだ。JASTJのホームページから簡単にアクセスできる。

記事は科学的知見にもとづく解説、科学論文、科学データ、コラム、科学コミュニケーションに役立つ情報などの区分で分類。会員が収集した一次情報を掲載するほか、会員による執筆原稿も積極的に掲載している。

5月末までの投稿数は125、約6万ページビューとなった。とりわけ、4月15日に掲載した小出重幸理事のコラム「新型コロナ対策:想定死者数の公開是非の議論をめぐって~科学の助言と政策決定のよりよい連携の機会



JASTJのCOVID-19に関する情報発信ページの 画面。

件かの寄付があった。

新型コロナに際し、重要な科学的知見が次々と更新されている。JASTJの社会的役割を担うために今後も活動を継続する。会員にはひきつづき有益な情報の積極的な提供をお願いしたい。 (副会長 瀧澤美奈子)

## <sup>随想 |</sup> "本物のコロナ"との出会い

新型コロナがパンデミックとなり鬱陶しい日が続いているが、そんな空気を吹き飛ばすため、私が出会った「本物のコロナの素晴らしい輝き」についてお話ししよう。本物のコロナとは太陽の外側に渦巻く超高温の希ガスのことだ。

普段は見えないが、見えるときがある。その皆既日食に最初に出会ったのは、今から57年前、1963年7月の網走日食のときだ。海の向こうの水平線から登ってきた欠けた太陽の、にゅっと突き出た「黄金の角」のような日の出に、まず度肝を抜かれた。やがて三日月形が全容を見せ、それが見る間に痩せ細り、一点を残して輝く「ダイヤモンドリング」へ。そ

して周囲は夜に変わる。空には星まで輝き、夜空には 真黒な太陽が…。その周囲に輝くコロナの美しいこと と言ったら、感動で心臓が止まるかと思ったほどだっ

その感動が忘れられず、私は定年直前から「皆既日 食の追っかけ」を始めた。皆既日食は、3年に2回く

らい地球のどこかで起きている。いつどこでみられるか何百年先まで分かっているのに、その日の天候は分からないからスリルがある。そのうえ皆既日食を追いかける旅は、日程も場所も自分ではなく、天が決めてくれるところが面白い。

私は、網走の「日の出日食」から始まって、2010年7月の南米パタゴニア

私は、網走の「日の出日食」から始まって、2010年7月の南米パタゴニアの「日没の日食」、最後はオーストラリアのケアンズ日食まで計12回追いかけて、アフリカの奥地や中東のへき地など、地球上のほとんどの地域を踏破することができた。しかも、12回のうち10回は晴れたのだから、日食の神様にも嫌われてはいなかったといえようか。ただ、当然晴れると思ったハワイ

とモンゴルが曇ったのは意外だった。

皆既日食はどこで見てもあまり変わりはないだろうとよく言われるが、それが違うのだ。パタゴニア日食やケアンズ日食にはJASTJ会員も何人か参加し、その後、ときどき集まっては気勢を上げている。

(前理事 柴田鉄治)



南米パタゴニアで見た日没の日食 (撮影 高木靱生)

## 深刻化する海洋異変

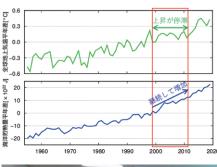
## 石井雅男・気象研究所研究部長に聞く

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行で自粛ムードが広がり始めた3月19日、いつもより席の間を広くとり換気にも注意した日本プレスセンター会議室で「深刻化を増す海洋の異変」と題した月例会が開かれた。講師は気象庁気象研究所の石井雅男気候・環境研究部長。昨年9月に気候変動に関する政府間パネル(IPCC)が公表し、石井さんも著者の一人となった「海洋・雪氷圏特別報告書」と気象庁の公開データをもとに、近年急速に進んでいる海の温暖化について話を聞いた。

### "地味"にすごい海の温暖化

世界的に経済活動が停滞し原油価格も大幅に下落した今、「温暖化も抑えられたのでは?」と期待する人もいるかもしれない。しかし、昨年は大規模な森林火災もあった。温暖化はさまざまな要因が複雑に絡み合い、解明が難しい現象だ。そこで、エネルギー・水・炭素などの地球規模の循環を"地球システムモデル"としてコンピューターで再現し、気候変動予測をする試みが世界中で進んでいる。

そうしたモデルで海の存在は大きい。「海は地味で目立たないが、海を理解することは気候変動の解明に欠かせない」と、石井さんは強調した。水の比熱は大きく、海の熱容量は大気の千倍にもなる。地球が蓄える熱の9割を海が取り込んでいるという。



1955年から2019年までの地球全体の平均気温の平年差(上段)と海洋貯熱量の平年差(下段)。海がため込む熱量は増え続けている。(気象庁ホームページ「海洋内部の知識」より)



深刻化する海水温上昇に関する講演に聞き入る参加者たち

ド加者たち (撮影 いずれも西野博喜) 「地味」にすごいことが起こっている。

「楽しそうに話しているよう に見えるかもしれませんが、深 刻なんです」と前置きして、石 井さんは次々にデータを示し た。まず、日本近海の海面水温 は100年で1.12℃上昇している。



石井雅男さん

海水温の上昇は台風の大型化にもつながり切実な問題だ。

観測機材の進歩で水深別のデータも蓄積され、海水温が表層を中心に上昇している様子も見ることができた。表層で温度が上がると、下層との密度差が大きくなり成層化する。密度変化は真水の流入でも起こり、欧州ではこれらがメキシコ湾流を弱めて寒冷化すると恐れられているという。データにもこの海域の水温低下が現れていた。

成層化によって海の貧酸素化も起きるという。日本の気象観測船による親潮域のデータは、酸素濃度が確実に低下していることを示していた。60年に及ぶデータは世界的にも貴重だという。貧酸素化は生物の基礎生産・漁獲量に影響する。

温暖化により海面水位は確実に上昇しており、石井さんが「島で一番高い場所が船のブリッジだった」というマーシャル諸島マジュロ環礁は非常に切羽詰った状況だという。日本近海も、この100年のデータで水位の上昇が明らかだ。台風による関西国際空港の高潮被害は記憶に新しい。日本も海抜の低い地域が多く、遠い南の島だけの話ではなくなっている。

### 危機的な酸性化の影響

海は人為起源の二酸化炭素の4分の1を吸収し酸性化している。日本の気象観測船によるデータが確実なpH低下を示していた。酸性化が生物に与える影響は深刻で「暖水性サンゴはすでに危機的状況」だという。地球温暖化を1.5℃未満に抑えてもサンゴを守ることが出来ないという現実に愕然とした。今、COVID-19パンデミックによって「新しい生活様式」という言葉が出てきているが、気候変動対策にこそこの言葉が必要だったのではないだろうか。

(会員 宮澤直美)

## 新型コロナの感染拡大いつまで

専門家会議委員の武藤香織・東大教授に聞く

「新型コロナウイルスの感染拡大はいつまで続く のか」をテーマにした4月例会は8日、Zoomによ る初のオンライン会議で開いた。政府の新型コロナ ウイルス感染症対策専門家会議の委員である武藤香 織・東京大学医科学研究所教授を講師に、また新型 コロナ感染症の拡大を最前線で取材する青野由利・ 毎日新聞論説室専門編集委員を代表質問者に迎えて 議論した。

## 初めてオンライン会議で

4月例会は「がん遺伝子パネル検査」をテーマに、 武藤さんと青野さんの対談形式で開く準備を進めて いた。しかし新型コロナの感染拡大とともに2人が 非常に多忙に、また多数の聴衆が集まる催しの自粛 が求められるようになって、急きょ開催テーマと方 式を変更した。

当日は例会の進行役(筆者の滝)が東大医科研の 武藤研究室に赴き、武藤さんのプレゼンを中継、青 野さんとオンラインでやりとりした。参加者からの 質問には、Zoomのチャット機能を使って武藤さん が答える形で進行した。

武藤さんは、専門家会議への参加を2月に突然、 厚生労働省から依頼された。4月初めには専門家が ソーシャルメディアを通じて国民向けにメッセージ を発信する「有志の会」を立ち上げた。例会では、 この間の経緯を豊富なエピソードを交えて率直に話 してくれた。

印象に残ったのは、今では恒例となった専門家会 議の記者会見が最初は想定されていなかったこと。 専門家会議は法的な位置づけがあいまいで、予算も 権限もない。政府は対外的な発信機能を会議に期待 しておらず、専門家側の発意で記者会見が実現した という。記者会見で示す国民向けのメッセージ(提



4月例会は武藤さん(左)の研究室からZoomで中継した。右はファシ リテーターを務めた筆者 (撮影 いずれも柏野裕美)

言)も、当初は 武藤さんらが 作成した。そ の後、記者会 見の効果に注 目した政府・ 厚生労働省が メッセージ作







りに介入し、提言作りを主導するようになった。

また、各地の保健所が集計し厚労省に集められる 感染者数などのデータが手書きで、書式も自治体に よって異なっていてファックスでやりとりされてい る実情も明かした。政府や自治体の電子化が遅れて いる実態は、後に集計誤りの報道で一般に知られる ようになった。

### 変わらぬ科学と政策の溝

青野さんからは、リスクコミュニケーションをめ ぐる専門家と政府の役割分担などに関する質問が あった。これに対し武藤さんは「専門家会議の記者 会見が生中継されていることに最初は気付かなかっ た。準備不足で臨んだ結果、視聴者には分かりにく い説明になった」とし、専門家の考えが一般に伝わっ ていないことへの危機感を示した。科学を政策決定 にどう活かすかという課題は、東日本大震災と福島 第一原子力発電所事故の際も問われたが、政府の姿 勢は「何も変わっていない」と青野さんは指摘した。

武藤さんはまた、「未知のウイルスと対峙して、 専門家が全てに正解を知っているわけではない。メ ディアは正解を求めすぎる」と発言した。科学報道 の在り方を考える上で重要な指摘に思えた。

参加者からは、自粛によって弱い立場の人たちが 追い詰められることへの心配や「科学技術の倫理・ 法・社会的課題(ELSI)」について市民の参加をど う深めるかなど、多数の意見や質問が寄せられた。

初のオンライン例会で、講演者側には聴衆の反応 が見えずファシリテーターとして不安を感じつつ進 行させていた。閉会後、満足度が高かったとの評価 を聞き、胸をなで下ろしたが、双方向性が劣る点は オンラインの難しさ、弱点であると思う。

(副会長 滝順一)

## 新型コロナで生活・社会はどう変わるか

世界3都市を結び議論

新型コロナウイルス(COVID-19)のパンデミックで日本政府が緊急事態宣言を発してから一カ月後の5月8日、日本科学技術ジャーナリスト会議(JASTJ)は初の試みとして東京・ロンドン・ニューヨークの3都市を「ネット会議システム」(Zoom)を使って結び、これからの課題と生活・社会の進むべき方向を考えるセッションを開いた。

セッションは日本時間の午後8時(ロンドン正午、 ニューヨーク午前7時)に開始、JASTJ会員に限定 して計38人が参加、約2時間半にわたって熱心な質 疑を重ねた。

ロンドンからは英国放送協会(BBC)などで働くフリージャーナリストでJASTJ会員の清水健さんを、ニューヨークからは監督として映画「おクジラさま」を制作したジャーナリストの佐々木芽生さんをゲストとして招き、東京での司会は室山哲也、代表質問は小出重幸、高橋真理子の各理事がそれぞれ担当した。

## 混乱と信頼を分けるもの

英国では3月中旬、政府首席科学顧問が「国民全体の6割が感染すれば、集団免疫による制御ができる」と発言。一方、政府の非常時科学諮問委員会(SAGE)のメンバーであるインペリアル・カレッジ・ロンドンのN.ファーガソン教授は「厳格なロックダウン政策を取らないと、25万人が死亡する」と警告し、結局、都市封鎖政策が決まった。

清水さんは、政府の見込み違いや対応の遅れで死者数がなかなか減少しない実情を紹介。専門家の意見対立や、政府専門家が「面会禁止」規制を破って自宅に女性の友人を招き入れたことが暴露され辞任したスキャンダルなどで、市民を失望させていると指摘した。

一方、感染によるニューヨークの死者は全米の4分の1を占め深刻な被害を出しているが、佐々木さんはマンハッタンの街路から人が消えた様子や低所得層、貧困地域に被害が集中していることなどを報告した。日本や英国と違い、米国では医療の皆保険制度がなく、「保障内容も保険会社ごとに違うなど複雑で低所得層は保険にも入れないため、適切な医療を受けられずに重篤化する例が多い」という。



東京・ニューヨーク・ ロンドンの名がだった。 ネットで結成のたたといい。 ションを指面ののではなった。 佐々大が清からないでは、 中央上は開かる。 大力ASTJの瀧澤 子副会長

(撮影 柏野裕美)



Zoom画面には参加した講師と会員38人の写真やイラスト、名前が (撮影 高木靱生)

ただ、ニューヨーク州では「クオモ知事の情報開示や根拠に基づく政策決定、市民に積極的に発信するという姿勢に多くの賛辞が寄せられ、大統領とは対象的に市民の信頼がとても篤い」と伝えた。

また、ロンドンは「福島原発事故の際には的確な 被害予測を発信して国際的な評価を高めた英政府の 科学顧問制度が、今回は混乱を重ねており、しかも 科学顧問の発表内容は市民に公開するという原則を 政府が破って情報開示を拒む場面もあり、メディア の批判を受けている」と、清水さんは説明した。

## 明らかになった日本の課題

国外から見た日本については、政府がデータや科学的判断など根拠にもとづく説明をしないこと、情報開示に消極的、PCR検査の少なさなどが目立つと、二人は口をそろえた。ニューヨークでも英国でも、実際にPCR検査を受けるハードルは高く、病院での治療にたどり着ける人も少ない。幸い日本での死者数は少ないが、日本の検査件数の少なさは突出しているため、各国と比較しての統計処理ができず、日本に批判が集まる背景になっているという。

3都市を結んだ討論を通して、日本の検査体制の 拡充と、行政の情報公開への意識改革、科学的助言 を政策決定に生かす仕組みづくり、などの課題が明 らかになった。 (理事 小出重幸)

## オピニオン

## 「例外状態」からの回復

「一応」というべきかもしれないが、新型コロナウイルスの緊急事態宣言が、5月25日に解除された。振り返ると、クルーズ船から始まり、国内感染の拡大、唐突な休校要請を経て、4月7日には緊急事態宣言があった。これを受け、私が仕事とする弁護士に関係するところでも、ほとんどの裁判所の訴訟期日が取り消され、あっという間に司法がいわばマヒ状態になった。

従前から、イタリアの哲学者ジョルジョ・アガンベンは、現代社会における権力論として、執行権力と法規範との関係で、執行が規範を踏み越える例外状態の常態化を指摘していた。司法のマヒは、法のチェックが十分に働かないことを意味し、まさに例外状態といえる。最後には、検察スキャンダルまで飛び出し、元来が事後処理的とはいえ、緊急事態に対する司法の距離や無力ぶりが露わになった。

そんな司法のマヒを横目に、活躍したのは科学であった。専門家会議を筆頭に、さまざまな科学者が報道やSNSを通じて活発に発言した。医療関係者の懸命の対応も連日報じられた。政治も、科学を無視できないことを覚えていき、首相の会見に新型イン

フルエンザ等対策有識者会議の尾身茂会長が同席するようになった。5月15日付けの日本経済新聞電子版は、この間の政治と科学の綱引きについて報じている。

上述のアガンベンは、例外状態とは政治的なものがしだいに法権利ではなく、生物学などによって規定されるようになる事態としている。今般の緊急事態は、ある意味、これが現実化したものだろう。ただ、アガンベン自身もそうだが、科学によって規定されることを、ナチスの優生学等も連想して悲観的に捉える論者が少なくない。確かに、感染拡大で、検査、陽性者、そして死者が数で捉えられるようになり、市民一人ひとりの個性が連日はがし取られるような思いがした。

そのような思いは世界中にあったのだろう。5月24日、ニューヨーク・タイムズ紙は、米国内の死者数が10万人に迫る中、1面を1000人の死者の名前や享年、一言紹介で埋めつくした。失われた個性のささやかな回復である。

例外状態から回復するには、ジャーナリズムの力 が必要なのであろう。 (理事 中道徹)

## WEB編集長から

いつもJASTJホームページをご覧いただきありがとう ございます。2020年3月以降にウェブにアップしてき た記事です。ご覧ください。

### □ 3月例会の案内

「深刻化を増す海洋の異変―観測データが示す気候変動―」(3月19日開催)について案内しました。新型コロナウイルスの感染拡大が社会問題になっていますが、夏の東京オリンピック・パラリンピックを前に、やはり気になるのは温暖化対策。3月31日には来年夏以降への延期が決まりましたが、月例会では最近の異常気象に関係する海洋異変に焦点を当て、長年海洋観測を続けている気象研究所の石井雅男氏をお招きして話を聞きました。

#### 【 ■「新型コロナの情報整理」ページ開設

新型コロナウイルスの感染が拡大するなかで国内の科学ジャーナリストを支援するために、「COVID-19 科学ジャーナリストのための情報整理」のページを開設しました。科学情報、科学データ、科学論文、感染拡大防止

の啓発活動などに関する信頼できる情報を収集・発信しています。すでに多くの記事を掲載していますので、ぜひご覧ください。ページへは下記URLよりアクセスできます。 https://note.com/jastj

### 【 ■ 緊急勉強会のお知らせ

「北大の西浦教授に実行再生産数(Rt)を使ったコロナ対策について聞く」と題した緊急勉強会(5月12日開催)の案内をしました。緊急事態宣言が5月31日まで延長され、地域の感染状況に応じた自粛要請などの行動制限が続きました。感染症対策で最も大切なキーワードの一つが、理論疫学が構築してきた数理モデルを使って導かれる「実効再生産数(Rt)」です。西浦教授に加えて米国インディアナ大学で理論疫学を研究している江島啓介さんをオンラインで迎え、その意味合いや数理モデル、データの取り方、計算方法のすべてを明かしていただき、実効再生産数(Rt)を正しく理解する勉強会をZoomによるオンラインで開催しました。

(WEB編集長 湯浅誠)

## JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2020年6月現在)



### AE海老名·綾瀬法律事務所

科学技術に強い法律事務所です。 弁護士 中道 徹 (神奈川県弁護士会)

AE 海老名・綾瀬法律事務所



東京理科大学



エルゼビア・ジャパン株式会社



株式会社東芝



花王株式会社



公益社団法人 日本アイソトープ協会



国立研究開発法人 科学技術振興機構



株式会社日本医工研究所



カクタス・コミュニケーションズ株式会社



日本学術振興会



株式会社構造計画研究所



株式会社豆蔵ホールディングス



サントリーホールディングス株式会社



国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構



一般財団法人 新技術振興渡辺記念会



ロート製薬株式会社

## 事務局だより

### ■ 新入会員の自己紹介

### ● 堀江 優美子 (株式会社ポッセ・ニッポン)

新聞社勤務時代は、科学部ではなく諸々のことを扱う社 会部におりました。しかし科学は、我々の生活や社会といっ そう密接不可分になっており、仕事でも気がつけば科学に 触れています。さらに見聞を深めたいと思います。

榎木 英介(一般社団法人科学・政策と社会研究室)

科学ジャーナリスト賞2011受賞者です。この度フリーラ ンスとなりまして、科学や医療の記事執筆を強化していき たいと思いまして入会することにいたしました。

#### ■ 滝田 恭子 (読売新聞東京本社)

読売新聞の科学部で宇宙開発や防災などの記事を書いて きました。現在、科学ジャーナリズムとは関係のない部署 にいますが、最先端の動きを追い、知識をアップデートし つづけるために参加させていただきたいと思います。

村松秀 (NHKエンタープライズ 番組開発部) 長年、科学番組制作を中心に、さまざまな特番制作や新 規の開発番組制作などをしてきました。JASTIには再入会 となりますが、ぜひまたこちらで勉強させていただければ と思います。

### ● 天野 彩(朝日新聞 北海道報道センター)

朝日新聞北海道報道センターで記者をしております。ポ スト3.11で感じた科学者と政治、報道機関がよい関係を築 くことの重要性を、コロナ禍でよりいっそう感じています。 自分にできることを考える毎日です。よろしくお願いいた します。

### 松田 美恵子(公益財団法人 東京都福祉保健財団)

地方公務員で医療福祉行政が長く、広報担当も務めまし た。現在、(公財)東京都福祉保健財団で福祉機器に関わ る仕事をしております。医療福祉に科学の視点やアプロー チは必須であり、懸け橋になるような活動、発信をしてい きたく思います。

#### 退会

多田卓、松尾友香

### 会員の BOOKS

#### 新刊紹介

#### 海は地球のたからもの 1~3

保坂直紀著(ゆまに書房・各2500円+税、 2019年11月~2020年3月)

小中学生向けの地球科学の本というと、ど うしても図鑑的で断片的な知識の羅列になり がちで、そういう本も書いてきた。海の大切



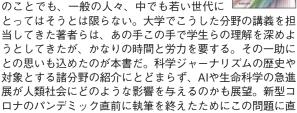
メディア 社会

さをテーマにしたこの3巻シリーズでは、もちろんプラスチ ックごみや酸性化といった個々の問題にも触れているが、熱 循環、水循環、炭素循環、生態系といったシステムとしての 地球の姿をお話しすることができた。貴重な機会だった。本 を書くというのは、つまるところ編集者との出会いなのだと 思う。 (会員 保坂直紀)

#### 「科学技術 メディア 社会・ -科学ジャーナリズ ム・コミュニケーション入門」 科学技術

北村行孝・柴田文隆著(東京農大出版会・税 別2600円・2020年3月)

科学ジャーナリズム、科学コミュニケーシ ョンとは何か—。JASTJ会員にとっては自明

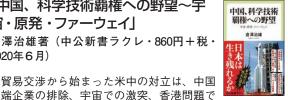


接触れてはいないが、「リスク社会とメディア」と題した1

章を設けて、リスク管理やリスクコミュニケーションの構造、 諸課題なども論じている。 (監事 北村行孝)

## 「中国、科学技術覇権への野望〜宇 宙・原発・ファーウェイ」

倉澤治雄著(中公新書ラクレ・860円+税・ 2020年6月)



先端企業の排除、宇宙での激突、香港問題で の対立へとエスカレートし、新型コロナウイルスをめぐる責 任論がこれに拍車をかけている。背景には科学技術分野での 中国の急速な台頭がある。米中の分断によりサプライチェ-ンは寸断され、技術や頭脳の囲い込みが始まっている。「グ ローバル・テクノロジーの終焉」だ。本書は科学技術の視点 から米中対立の深淵を読み解き、日本が「科学技術立国」と してきらりと輝き続けるための道を探る。(会員 倉澤治雄)

### 「マスコミ セクハラ白書」

WiMN(メディアで働く女性ネットワーク)著(文藝春秋・ 1600円+税・2020年2月)

WiMNは、メディアを変えることで女性だけではなく誰も が生きやすい社会を作るため、財務次官による女性記者への セクハラ報道直後の18年5月に設立された。筆者は、フリー ジャーナリスト(元朝日新聞)の林美子さんの歩みを執筆し、 自分自身の歩みを林さんに執筆していただいた。痛感したの は、ジェンダー問題はあらゆる場ですべての女性を大なり小 なりさいなみ続けており、卓越した地位や経歴も"護符"に はならない事実だ。医学部入試の女子差別など科学・技術界 にも共通するこの問題を理解し解決していくための最初の一 冊として、心からお勧めできる。 (理事 三輪佳子)

編集 後記

▶新型コロナが拡大する中での難しい編集作業でしたが、何とか無事に校了できました。今号をもって編集長は井 上能行理事に交代します。ICT化の加速に加えコロナ禍で社会が激変する中で、今後どのような誌面が見られるか 期待しています。編集長を務めたこの8年間、多くの皆さまにご協力いただいたこと、深く感謝しています(靱)。

### 編集・発行



## 日本科学技術ジャーナリスト会議

Japanese Association of Science & Technology Journalists (JASTJ) 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル8階848 Email: hello@jastj.jp

室山哲也/事務局長 山本威一郎 編集長 高木靱生/副編集長 柏野裕美、倉又茂